

# ZOCALO 2026 4 ▶ 6

ZOCALO=ソカロは  
メキシコの都市の広  
場を意味するスベ  
イン語。埼玉県立近代  
美術館はアートを通  
じて交流する市民の  
広場をめざしています。

ショー・ウィンドウに飾られたら、  
誰もが立ち止まって見るような椅子を作るつもりだ。

…エーロ・アールニオ(註1)

## 【主な記事】

クラウドファンディング 関連特集

MOMASコレクション 関連特集「2024年度 新収蔵作品」

MUSEUM NEWS 2026.4 ▶ 2026.6

ミュージアムショップおすすめ商品

MOMASコレクション 関連コラム

「頭/体」より ―志賀直哉と「頭部」について

令和7年度 公募展 報告

みつめて、かんじて、たべてみて！ ― 作品のみかた・味わいかた

(ボールチェア)の最初期のプロモーション用写真(撮影:エーロ・アールニオ/1967年)  
註1)下記のサイトに掲載された「ボールチェア物語/The Story of the Ball Chair」より。  
<https://www.aarniooriginals.com/>

この度、埼玉県立近代美術館は、ふるさと納税制度を活用したクラウドファンディングのプロジェクトにより、フィンランドのデザイナー、エーロ・アールニオが1960年代半ばに手掛けた名作椅子《ボールチェア》を収集することができました。開館当初からデザイン・チェアを収集し、「椅子の美術館」として親しまれてきた当館の歴史の中においても、忘れがたいプロジェクトのひとつになりました。ご支援をいただきました皆さまに厚く御礼を申し上げますとともに、《ボールチェア》の幅広い活用を目指していきたいと考えております。



アールニオはどのようなデザイナーで、《ボールチェア》はどういった背景で制作されたのでしょうか。60年以上経た現在でも、この椅子が世界中のファンを魅了する理由はいったいどこにあるのでしょうか。

アールニオは1932年にヘルシンキで生まれています。フィンランドは第二次世界大戦における大国の争いに翻弄された歴史があり、アールニオも戦時下の社会を体験していますが、本人が後に語ったところによれば、子供の頃は絵を描いたり、模型を組み立てたりするのが大好きだったということです(註2)。戦後、建築事務所での研修を経て、1954年にヘルシンキの工業芸術学校に進学し、建築デザインを学びます。卒業後、1960年から2年ほど、フィンランドの世界的な家具会社アスコ社でデザイナーとして働き、職人との協働作業の経験を積んでいます。そして、1962年、30歳の時に独立して、デザイン事務所を構えることになりました。

1950年代末からイタリアのカントウの国際家具コンペティションで受賞するなど、精力的に活動していたアールニオがフリーランスになった直後に意欲を注いだのが、《ボールチェア》の制作でした。アールニオは、新素材として普及し始め流線形のポートに使用されていた繊維強化プラスチックを、家具へ転用することに関心を抱いていました。曲面や球体にすると素材の強度が生かせる繊維強化プラスチックの特性に着目し、内部に腰を下ろせるボール型のシェル構造の椅子を構想し、試作品を制作します。アールニオの革新的なアイデアに着目したアスコ社がその製品化を試み、1966年のケルン国際家具見本市で《ボールチェア》を発表したところ、瞬く間に世界中から脚光を浴びるようになりました。アールニオは全く意識していなかったそうですが、プラスチック系の素材を用いた《ボ

ールチェア》の球体状の軽やかなデザインが、1960年代に多くの人が憧れていた近未来的なSF世界や宇宙的なイメージを喚起したのでしょう。スペースエイジといわれるこの時代の愛すべきデザインのアイコンとして、《ボールチェア》は現在まで語り継がれています。

ところで《ボールチェア》をもう少し広い観点から探っていくと、この椅子に関わる歴史的あるいは同時代的な文脈が、いくつか浮かび上がります。

例えば、堅苦しさがなく、遊び心を感じさせる《ボールチェア》は、戦前のドイツのパウハウスなどの流れに見られる、無駄をそぎ落とし機能性を重視する合理主義的なデザインとは異なる傾向にあります。むしろ《ボールチェア》は、フィンランドの先達の建築家、アルヴァ・アアルトが手掛けた椅子《パイミオ》(デザイン:1930-31年)の穏やかなデザインや、同じくフィンランドで生まれアメリカで活躍した建築家、エーロ・サーリネンによる椅子《チューリップ・チェア》(デザイン:1956年)の有機的な形態のデザインの系譜にあると言えるでしょう。また遊び心のあるデザインは、アキッレ・カスティリオーニといったイタリアのデザイナーたちに通じる要素があり、アールニオの趣向はイタリアのデザインとも親和性が見出せます。実際にアールニオは、最初期からコンペティションなどを通じて、イタリアのデザイン界とも関わっています。

世代的な側面に目を向けると、アールニオは1960年代のカウンター・カルチャーやポップ・カルチャーの影響を受けた世代にあたります。1960年代は、大衆的なイメージを扱うポップ・アートが美術界で話題になると同時に、スウィング・ロンドンと呼ばれる英国の若者文化が登場し、ビートルズの音楽やカラフルで斬新なファッションが流行しました。因習的な規範、価値観、美意識を刷新しようとする、同時代の新たな潮流の只中で、《ボールチェア》が誕生し注目されていった点は、文化史的に見逃せないところでしょう。

さらに、椅子の内部に身を置けば、周囲から遮断された自分だけの部屋となる《ボールチェア》は、当時の実験的な建築動向に連なる特質も指摘することができます。すなわちどんな場所に置いても、プライベートな環境を即座に保てるというこの椅子のアイデアは、同時代のラジカルな建築家等が夢想/構想した極小単位の住居、移動可能な極小の建築などに通じるからです。例えばウィーンの建築家ハンス・ホラインは、1965年のパリ・ビエンナーレから参

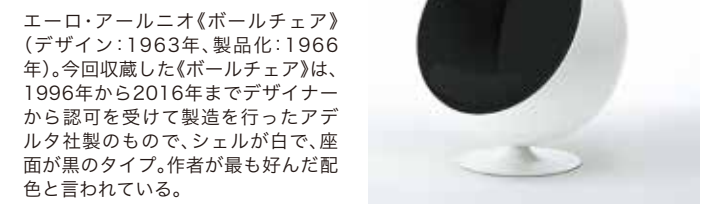
加依頼を受け、電話ボックスを元にした住居《極小環境》を、ヴァルター・ピヒラー、エルンスト・グラフと共に構想しています。実現しなかったものの、プライベートな環境を確保しつつ、装備された電話やテレビなどの通信技術を通して外界とも接触できるというプランです。ホラインによるこの実験的なコンセプトは、後年に撮影された写真ですが、《ボールチェア》の中で電話をするアールニオのプロモーション用のイメージに見事に重なりあってきます。

その後、アールニオは《ボールチェア》の続編といえる、吊り下げられた透明な球体の中に座る《パブルチェア》(デザイン:1968年)を発表し、更なる注目を集めます。1970年代以降も、ポニー(小型の馬)をモチーフにした椅子、照明器具、子供向けの家具など、主にプラスチック系の素材を用いてユーモアに溢れたデザインを次々と発信してきました。デザイン大国として知られるフィンランドの戦後を代表するデザイナーとして、今年94歳を迎えるアールニオは、現在も活動を続けています。(H.I.)

註2)下記のサイトに掲載された、2022年の90歳を祝うインタビューより。  
<https://eeroaarnio.com/>  
※アールニオに関する記述については、上記のサイトのほか、下記の文献を参照。  
・Eero Aarnio-Värin ja ilon muotoilija (Eero Aarnio-Designer of Colour and Joy), WSOY, Finland, 2016.



《ボールチェア》の中で電話をする  
エーロ・アールニオ



エーロ・アールニオ《ボールチェア》  
(デザイン:1963年、製品化:1966年)。今回収蔵した《ボールチェア》は、1996年から2016年までデザイナーから認可を受けて製造を行ったアデルタ社製のもので、シェルが白で、座面が黒のタイプ。作者が最も好んだ配色と言われている。

## 2024年度 新収蔵作品

ここでは、2024年度に寄贈いただき、新たに当館のコレクションに加わった作品をご紹介します。

長沢秀之(1947-)の《風景―曖昧な存在》(図版①)は、当館で1999年に開催した企画展「呼吸する風景 ―長沢秀之・佐藤時啓・平田五郎―」に出品された作品です。「風景」を主題に、しかし具体的なイメージから離れ、絵具という物質を塗っては消し、再び塗り重ねる行為から立ち現れるものを探究した、90年代の長沢の主要作品のひとつです。この度、寄託から寄贈へ切り換えいただき、コレクションに加わった根岸芳郎(1951-)《88-1-20》とともに、1980年代以降の絵画表現を担った作家の力量を示す作品といえ、当館コレクションで手薄なこの時代の絵画の収集の核になるものです。

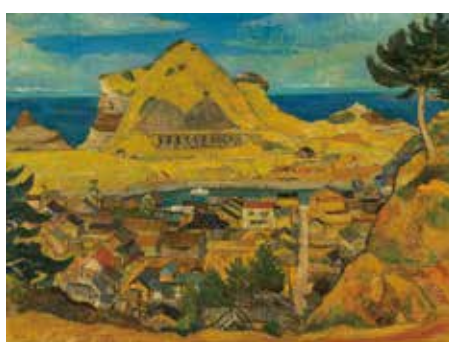
当館は1970年代美術に特に力を入れて収集してきましたが、沢居曜子(1949-)の《Line-Work VI-78-21》シリーズのドローイング7点(図版②)は、多くの作家がコンセプチュアルな作品の制作に取り組んだこの時代を代表する重要な作品です。



① 長沢秀之《風景―曖昧な存在》1992年  
油彩・カンヴァス



② 沢居曜子《Line-Work VI-78-21》1978年  
コンテ・ケント紙



③ 小松崎邦雄《仁科の岬》1956年、油彩・カンヴァス

カッターナイフで紙に切り込みを入れ、コンテで表面をなぞることで、切り込みと線の交点に残ったコンテが視覚的なリズムを生む、繊細ながら強度のある表現といえます。

また、70年代は日本の版画が独自に発展し、多くの実験的でユニークな表現が生み出された時代で、ポートフォリオや詩文集なども次々に制作、出版されました。その時代の活気を伝える中林忠良(1937-)、小作青史(1936-)、柄澤齊(1950-)の70年代の版画集の寄贈も受けました。2024年度に、当館で回顧展を開催した吉田克朗(1943-1999)による貴重なリトグラフとともに、70年代の美術動向をより多角的に検証することができる収蔵となりました。

県ゆかりの作家の作品も多く寄贈いただきました。堀田操(1921-1999)は、廃墟や動植物などをモチーフに、シュルレアリスムの手法を用いて心象風景を描いた作品で知られています。当館では既に1950年代の油彩画を4点収蔵していますが、新たに後年の作品を含む3点の油彩画を受贈し、その画業の幅広い紹介が可能となりました。堀田と

## MOMASコレクション「さいぎんのだまもの」 2026年3月7日(土)～5月31日(日)

同じく福沢一郎に師事した早瀬龍江(1905-1991)の油彩画や、横尾龍彦(1928-2015)のドローイングなど、近年紹介と収集を進めている作家の作品も新たに収蔵しています。

また、西洋人形や天使、舞妓をモチーフにした精緻な写実絵画で人気を博した小松崎邦雄(1931-1992)の初期作品《仁科の岬》(図版③)は、高田誠からの学びを感じさせるといって健やかな作品です。独自のテーマの深化を感じさせる《四月の日曜日》とあわせて、「浦和画家」のひとりである作家の画風の展開を知ることができるでしょう。

写真がファインアートとして認知され始めた1980年代から独自のフォトコラージュの手法を一貫して追求してきた出店久夫(1945-)の新作3点、2023年度の「アーティスト・プロジェクト #2.07」で紹介した永井天陽(1991-)の同展出品作といった、県内を拠点に旺盛な活動を展開する作家による同時代の作品を収蔵できたことも意義深いことです。このほか、加藤清美(1931-2020)の油彩画1点、池田満寿夫(1934-1997)の1960年代の銅版画6点が新たにコレクションに加わりました。

ご紹介した作品の一部は、開催中のMOMASコレクション「さいぎんのだまもの」で展示しています(5月31日まで)。修復や額装を要する作品は今回展示できませんでしたが、必要な処置を施したうえで、MOMASコレクション内で順次ご紹介していく予定です。大切になさってきた作品をご寄贈くださいました皆さまに、この場を借りて心から御礼申し上げます。(O.I.)